

Title	日本における心理的感受性概念とその測定方法についてのレビュー
Author(s)	松崎, 美奈子
Citation	大阪大学教育学年報. 2024, 29, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94612
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本における心理的感受性概念と その測定方法についてのレビュー

松崎 美奈子

要旨

本稿では、過去10年間で心理的感受性を扱った日本国内の文献を収集し、そこで扱われている心理的感受性概念とその測定方法についてまとめた。心理的感受性は大きく[1]感覚処理感受性、[2]対人関係・社会生活における感受性、[3]その他特定の刺激に対する感受性、の3つに分類され、感覚刺激に対する感受性を扱った[1]の文献数が最も多かった。感受性の概念とその測定方法の曖昧さについて調査から見てきた問題点は、「HSPは生きづらい」という社会の曖昧な印象においておそらく[1][2][3]のような刺激の分類は想定されておらず、その結果として、個人の「生きづらさ」に合わせた感受性の測定や詳細な自己理解が困難であることだ。研究においても、複数の感受性概念とその測定尺度の関係性が構造化されておらず、使用尺度の選択や因子構造が各研究で異なるため、曖昧さが生じていると考えられる。そこで、概念間や測定尺度の関係性を明示・構造化すること、様々な手法や視点をを用いた多角的な検討を行うこと、感受性に関する実践研究や知見の普及を進めること等が、今後の心理的感受性研究の展望として挙げられる。

問題と目的

昨今、文献や日常生活の中で「HSP」や「～感受性」の語を多く目や耳にする。HSPとはHighly Sensitive Personの略語であり、感覚処理感受性（Sensory Processing Sensitivity ; SPS）の高い人のことを指す（Aron & Aron, 1997）。HSPは全人口の約15～20%（約5人に1人）存在すると言われていることから、多くの人にとって非常に身近な概念であることが分かる。

「HSP」や「感受性」の概念の曖昧さ

しかし概念の曖昧さがゆえに、「HSPは感受性が高い人」「生きづらさを抱えている」というような一面的な印象ばかりが社会に浸透しているように思う。自分がHSPだと自認している人の多くが、感覚処理感受性の概念や、感受性の種類、強み等については理解していないことが推察される。逆に、感受性の側面を考慮せずに精神疾患等への臨床的アプローチがとられている可能性もある（赤城・中村, 2017）。個人が有する感受性の性質や、刺激状況下によって、感受性の高低が強みとなるか生きづらさとなるかは様々だ。そのため、一概に「感受性が高い/低い」「HSPか否か」という視点だけでなく、「どのような刺激に対する感受性が高い/低いのか」といった詳細な自己理解が促進されることで、個人人の適応的な行動選択が可能になると考えられる。また、感受性概念間の関連性についても知見の普及が望まれる。

そこで、まず「感受性」という語の意味から確認する。感受性を測定する複数の心理尺度名に「敏感性」の語が使用されていたため、「感受性」と「敏感」の2語を2種類の日本語辞典で調べることとした（「敏感性」は辞典に記載がなかった）。

「広辞苑 第七版」(2018年発行)では、「感受性」は「①外界の印象を受け入れる能力。物を感じとる力。感性。②生物体において、環境からの刺激、特に薬剤や病原体により感覚または反応を誘発され得る性質。受容性。」と説明されている。また、「敏感」については「感覚の鋭敏なこと。わずかな変化でもすぐ感じとること。」とある。

さらに「講談社カラー版 日本語大辞典 第二版」(1995年発行)には、「感受性」は「①外界の刺激を、印象として心を感じとる能力。感受力。②生理的に、環境や身体に対する刺激に感覚や反応を起こすことができる性質。」、「敏感」は「感じ方が鋭いこと・さま。」と記されている。

これらの記述から、「感受性」という言葉には「心理的な感性の能力」と「生理的な身体反応の性質」の2つの意が含まれていることが分かる。中でもメンタルヘルスに繋がる特性は前者であると捉えられる。また両辞典共に、前者の心理的感受性を「(能)力」、後者の生理・身体的感受性を「性質」と表しており、語感からは後者の方が生得的な要素が強いという印象を受ける。しかし、感受性が生得的なものであるか後天的に獲得される特性なのかについては、これらの説明からは読み取れない。研究においても、対象となる感受性は大きく「心理的な感性の能力」と「生理的な身体反応の性質」に分けられそうである。

「敏感」の語については、刺激や感覚の種類を問わず、「鋭いこと」の意のみが記されていた。また「感受性」や「敏感」の説明において、特別ネガティブな意味合いは確認されなかった。

感受性の測定方法の曖昧さ

概念の曖昧さの帰結として、感受性の測定方法についても曖昧な面が多い。Aron & Aron (1997)が開発した“Highly Sensitive Person Scale” (HSPS) は神経的・生得的な感受性を測る尺度であり、臨床的な用途は意図されていないため、メンタルヘルスに影響を与えうる対人刺激の影響については項目数が少なくなっている。しかし、日常生活でよく用いられる「HSP」については、対人場面での生きづらさの面も強調されている。とすれば、HSPSや感覚処理感受性の尺度は、多くの人が思い描くHSPの測定に必ずしも適しているとは限らない。岐部・平野 (2019) は、対人刺激を含めた環境からの刺激の影響を測定できるような尺度の検討が必要であると主張している。

一方で対人感受性や拒絶感受性等の尺度も複数見られるが、日本では他者への感受性に関する尺度を用いた研究は少ないとされる (江田・日高, 2007)。加えて、結城・月元 (2021) は、心理尺度を用いた自己評定法だけでなく、幼少期からの縦断的な観察等の客観的指標や、認知・行動・知覚・生理等の多様な側面から感受性を捉えることが必要だと論じている。2023年の現時点で、対人関係を測る心理尺度や、尺度以外の測定方法は、日本でどの程度用いられているのだろうか。

概して、心理的感受性の概念とその測定方法については未だ曖昧さが残り、対象者の状況に応じた詳細な調査と感受性に対する自己理解の促進が困難である点が課題であると捉えられる。

以上を踏まえ、本稿では過去10年間で心理的感受性を扱った日本国内の研究を概観し、そこで扱われている感受性の概念とその測定方法についてまとめることを目的とする。

方法

CiNii Articlesで「感受性 心理」「敏感性 心理」「Highly Sensitive Person」と検索し、2014年～現在 (2023年10月4日時点) の過去10年間に投稿された文献を収集した。「敏感性」という単語自体は日本語辞典に記

載がなかったが、感受性を測定する複数の心理尺度名に使用されていたため、検索語の1つとした。日本国内で行われた研究のみを対象とし、ポスター発表や紀要論文等も含めて収集した。検索語の2つに「心理」を入れた目的は、心理的な感受性・敏感性を扱った文献に焦点を当てて調査するためである。

抽出された文献の中から、まず生理・身体的感受性を扱う文献（心理を扱っていない文献）を除外した。次に測定方法を検討するという目的に沿い、レビュー論文や論評のみの文献は除き、心理尺度や自由記述等の何らかの方法で感受性を測定している研究と心理尺度を作成している研究のみを採用した。

結果と考察

検索の結果、合計で206件の文献がヒットした。そのうち心理的感受性を測定している文献のみを抽出したところ、合計で69件となった。心理的感受性は、感覚処理感受性の枠組み（A）、対人関係・社会生活における感受性の枠組み（B）、特定の刺激に対する感受性、に大きく分類できた。以下の考察では概念についての測定方法が多様であるA、Bに焦点を当てることとした。さらに心理尺度以外の測定手法を用いた文献については、上記の分類を問わず別途記載した。

Table1. 抽出された文献で使用されていた心理的感受性とその件数

	文献中で測定・尺度作成されていた感受性 ※（）内は該当した文献数
A. 感覚処理感受性 B. 対人関係・社会生活における感受性	A. 感覚処理感受性・感覚感受性・環境感受性（42） B. 対人感受性・拒絶感受性（7）、社会的スキルとしての感受性（5）
その他特定の刺激に対する心理的感受性	嫌悪感受性（4）、公正感受性（3）、報酬・罰感受性（3）、倫理的感受性（2）、援助要請感受性（1）、自然への感受性（1）、感謝感受性（1）

A. 感覚処理感受性の枠組み

感覚処理感受性の枠組みには、感覚感受性、環境感受性が分類された。抑うつとの関連を検討している文献が複数見られ、その他にも感覚刺激に対する感受性と複数の精神状態との関連性が示されていた。

A.1 感覚処理感受性と成人版尺度

「感覚処理感受性」は、社会的・感情の手がかりを含む内的・外的刺激に対する感受性によって特徴づけられる、気質・性格特性とされる（Aron & Aron, 1997）。HSPS（Aron & Aron, 1997）は、面接で特定された特徴を元に作成された成人用の感覚処理感受性の測定尺度である。HSPS短縮版（Aron et al., 2010）は、HSPS27項目の全体の得点との相関が最も高くなる11項目（1因子）から成り、参加者の負担を軽減する目的で作成・使用されている。HSPSには創造性や美的感受性を測る項目も含まれているが、Aron & Aron（1997）は尺度の次元性を主張した。しかし後に二次元構造（Evans & Rothbart, 2008等）や三次元構造（Smolewska, McCabe, & Woody, 2006等）を示す研究結果も複数提示され、未だHSPSの因子構造については確定していない。そのため、HSPSの全体得点のみでは、個人がどのような刺激に対して感受性が高い/低いについては特定できない。HSPSを元に作成された日本版のHSPS-J19についても、分析に使用する際には各因子ごとに他の測定要素との関連を確認する必要がある（高橋, 2016）。そこで感覚処理感受性に関しては、基盤となるHSPSの曖昧さがゆえに、各研究の文脈に応じた測定の工夫が求められる。

ここからは、過去10年間で日本で作成された感覚処理感受性尺度について概観する。

船橋 (2013) は感覚処理感受性の概念に基づき、「感覚感受性」の高い成人を判別するための「成人用感覚感受性尺度」(“Adult Sensory Sensitivity Inventory”: ASSI) を開発した。美的感受性等の肯定的な要素は含まれないが、尺度構成の一次元性を支持しえない項目が複数確認されている。その後、ASSIは薄ら (2015) や高橋ら (2015) 等で使用されていた。特に薄ら (2015) は、感覚感受性と対人関係の関係性を検討しており、対人関係の項目が少ないASSIを用いても対人刺激に対する感受性が予測できることが確認されている。

後に高橋 (2016) が開発した「Highly Sensitive Person Scale日本版」(HSPS-J19) は、2016年以降、日本の多くの感受性研究に用いられている。HSPS-J19はHSPS (Aron & Aron, 1997) の翻訳・修正を経て作成されており、「低感覚閾」「易興奮性」「美的感受性」の3因子が確認されている。また、HSPSを元に作成された「中国版HSPS」では「易興奮性・低感受性」「感受性」「美的感受性」の3因子が確認され、HSPS-J19とは因子を構成する項目が異なるが、因子構造は近くなっている (李・申崎, 2021)。

一方で平野 (2012) は、HSPS (Aron & Aron, 1997) の日本語版23項目において「ネガティブな敏感さ」と「ポジティブな敏感さ」の2因子を見いだし、リスクとなりうる「ネガティブな敏感さ」のみを「心理的敏感さ」の測定に使用した。土田 (2019) は、HSPS-J19における美的感受性には社会的バイアスにより信頼性への疑問が残ると指摘し、調査には「ネガティブな敏感さ」項目 (平野, 2012) のみを使用している。

A.2 環境感受性とHSCS

「環境感受性」は、外的要因を認識・処理し、反応する能力である。周囲の環境への適応と関連するためほとんどの生物に見られる基本的な特性だとされるが、その高低には個体差がある (Pluess, 2015)。環境感受性の測定には感覚処理感受性の尺度が用いられることが多いため、感覚処理感受性に相当する概念だと捉えられる。一方、子どもの発達における環境からの影響という文脈でも、「環境感受性」の語が使用されていた。そこで以下、児童期～青年期を対象とした感受性の概念とその測定方法について概観する。

感覚処理感受性が高い子どもはHighly Sensitive Child (; HSC) と呼ばれ、HSCに関する主な測定尺度には、HSPSを元に作成された“Highly Sensitive Child Scale” (; HSCS) がある (Pluess & Boniwell, 2015)。日本においても、平野・岐部・鈴木 (2018) が高校生の環境感受性を測るためにHSCSを使用しており、飯村 (2016) はASSI (船橋, 2013) を元に感覚刺激に対する「中学生用感覚感受性尺度」を作成している。児童期～青年期までを対象にした複数の研究では、「環境感受性」の他に「感受性反応理論」(Differential Susceptibility Theory: DST) についての記述も多く見られた。「感受性の高い者は、環境から、ネガティブな影響だけでなくポジティブな影響も受けやすい」とする理論であり、感受性の個人差は差次感受性 (susceptibility) として捉えられている (Belsky et al., 2007)。そこで、ポジティブ/ネガティブ両面の刺激に対する感受性を発達段階に合わせて簡便に測れるような尺度開発の必要性が指摘され (岐部・平野, 2019)、近年HSCS (Pluess & Boniwell, 2015) を元にした「日本語版青年期用感受性尺度」(HSCS-A) (岐部・平野, 2019)、さらにHSCS-Aを小学生用に平易にした「日本語版児童期用感受性尺度」(HSCS-C) (岐部・平野, 2020) が作成されている。ただし、これらの尺度で測られている環境刺激はいずれも感覚刺激の要素であり、対人刺激の項目はほとんど見られない。DSTを踏まえると、HSCは感覚刺激からのみでなく周囲から様々な影響を受けやすいと言える。したがって、周囲の他者や教育環境等からの影響についても検討するために、発達年齢を考慮した対人感受性の尺度が別途必要であることが示唆される。

B. 対人関係・社会生活における感受性

発達心理学や教育心理学, 臨床心理学, 社会心理学等の複数の分野においても, 感性や共感性, 感情認知, 対人知覚のような視点から, 感受性の働きが着目されているようだ(三好, 1999)。対人・社会的場面は多種多様な刺激や状況が想定されるため, 感受性の検討方法も多岐に渡ると推察できる。そのため, 対人関係や社会生活における感受性概念をどう分類し, 適切に測るかという点は難しく, 今後の教育・臨床の応用に繋げていくためにも概念とその測定方法の整理が必要になる。

B.1 対人感受性

「対人感受性」とは, “Interpersonal Sensitivity” の訳であり, 「他者の言動, 状態に関する過度の敏感さと被影響性」と定義される(江田・日高, 2007)。対人感受性を測る尺度としては, Boyce & Parker (1989) によって開発された “Interpersonal Sensitivity Measure” (; IPSM) が挙げられる。うつ傾向との関連性を検討するために作成された尺度であり, 「対人関係への意識」「賞賛欲求」「分離不安」「臆病さ」「内的自己の脆弱性」の5つの下位尺度から構成される(Boyce & Parker, 1989; 江田・日高, 2007)。

日本では, 桑原ら(1999)が「日本語版IPSM」を作成し, 後に江田・日高(2007)によって項目が追加され, 「対人感受性尺度」が開発されている。この対人感受性尺度(江田・日高, 2007)は「否定的感受性」と「肯定的感受性」の2因子から成り, 一定の信頼性と妥当性が確認されている。対人感受性尺度は, 「日本語版社会的スキル尺度」(榎野, 1988)の下位尺度である「情緒的感受性」と「社会的感受性」との間にそれぞれ中程度の相関があることが確認され, 併存的妥当性が検証された一方で, 対人感受性とスキルとしての感受性の測定尺度には内容に相違があると考察されている(江田・日高, 2007)。

また, 対人感受性の中では特に精神的な問題と関連するような否定的な要素に注目が集まっている傾向が窺えた。菊池ら(2018)は, 否定的感受性因子の項目のみを用い, 否定的感受性が対人ストレスとストレス反応を媒介する要因であるかについて検討していた。寺田(2018)や安達(2020)は, 対人感受性の否定的な影響を「拒絶感受性」と解釈し, 対人感受性尺度(江田・日高, 2007)の否定的感受性因子の得点を, 拒絶感受性得点として使用していた。しかし対人感受性尺度の否定的感受性因子の内容を見ると, 他者からの拒絶に関する項目もあれば, 他者との直接的な関わりではない項目もある。そのため否定的感受性項目をそのまま「拒絶感受性」として使用することについては疑問が残る。寧ろ拒絶感受性は, 対人感受性の中の否定的感受性に内包される概念の一つとして位置づけられるのではないだろうか。そこで, 続いて拒絶感受性の概念やその測定尺度について確認することとする。

B.2 拒絶感受性

「拒絶感受性」は「他者からの拒絶の手がかりに対して過剰な予期不安をもち, 防衛的・否定的に反応する傾向」と定義される(Downey & Feldman, 1996)。抑うつを始めとする精神的問題との関連が示されており, 対人関係や精神的健康に影響を与える個人特性だとされている。海外と比較すると日本での拒絶感受性の研究は少なく, 鳥越(2020)は「新型うつ」との関連性等も含め検討を進める必要性を指摘している。

次に日本で開発された尺度について概観する。三島(2014)は, Downey, Lebolt, Rincon, & Freitas (1998)の “Children’s Rejection Sensitivity Questionnaire” (; CRSQ) を参考に小学校高学年の生活場面に合わせた「小学生拒絶感受性尺度」を作成し, 「対人関係の不安定感・拒絶の予期」「拒絶に対する不安・過敏」「拒絶に対する怒り・反撃」の3因子を確認している。項目は全て友人に対する感受性を測る内容だ。三島(2015)

は当尺度を用いて、小学生4～6年生を対象に「循環型いじめ」と拒絶感受性との関係性を検討している。

相田・磯部（2015）は、本多・桜井（2000）の「日本語版拒否に対する感受性尺度」を用い、拒絶後における表情の選択的注意について調査していた。本多・桜井（2000）の当尺度は、Downey&Feldman（1996）の“Rejection Sensitivity Questionnaire”の日本語版として作成された。日本人に合わせた複数の対人依頼場面について、相手から受容または拒否されることへの「不安の程度」「期待・予期の程度」の2つを問い、その得点を掛け合わせ、感受性得点を算出する。この方法はBandura（1986）の期待価値モデルに基づいており、基盤となる“Rejection Sensitivity Questionnaire”（Downey&Feldman, 1996）も同様の処理方法である。また場面設定が大学生向けとなっているため、相田・磯部（2015）のような大学生を対象とする調査において有効な尺度である。友人や恋人や両親や教授等、幅広い人間関係に関する項目で構成されている。

このように、本調査で得られた拒絶感受性尺度はいずれも実際の生活場面を想定した項目になっており、測定対象者の年代が限定されていた。家族や友人や恋人等の相手要因によっても拒絶感受性は変わると考えられ、個人のその傾向を見ることで、特定の関係性における問題点が見えてくるかもしれない。

B.3 社会的スキルとしての感受性

前述の対人感受性、拒絶感受性の文献では、主に感受性の不適応的な側面に視点が当てられていた。しかしその一方で、感受性の高さは対人関係・社会生活における肯定的なスキルとしても捉えられている。

倉田・新井（2015）は、与えられた状況で感謝を感じることができる程度を測る「感謝感受性尺度」を作成し、感謝感受性の高さが人間関係（外的適応）や精神満足度（内的適応）に関連することを発見した。

大嶋ら（2016）は、セルフ・モニタリングにおける能力を「感受性」と「変容性」の二次元で捉え、組織内政治の知覚との関連を検討している。「改訂版セルフ・モニタリング尺度」（Lenox & Wolfe, 1984）の下位尺度の「感受性」項目は、他者のノンバーバルなサインに対する敏感さを測る内容となっている。

島本・山本（2018）と奈良・木内（2000）が使用していた「日常生活スキル尺度（大学生版）」（島本・石井, 2006）は、「対人スキル」と「個人スキル」の合計8つのスキルを測る下位尺度から構成され、対人スキルの1つが「感受性」となっている。「困っている人を見ると援助をしてあげたい」「他人の幸せを自分のことのように感じる」「悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる」の3項目が感受性に該当する。特に3項目目に該当する個人は不適応状態であるとも解釈できるが、社会的な観点から見れば、他者に共感的に寄り添えるという強みであるとも捉えられる。したがって、臨床的に個人な精神的健康に着目するか、あるいは肯定的な社会的スキルに焦点を当てるかといった研究の背景によって、感受性の捉え方や使用尺度は異なると結論付けられる。

C. 心理尺度以外を用いた感受性の測定

69件の文献のうち、心理尺度以外の方法を用いて測定していた文献は4件であった。

藤後・磯・坪井（2014）は「自然への感受性」を測るために、特定の自然に関する視覚的刺激と聴覚的刺激を与え、その内容の正答率とそこから連想するものについての自由記述を求めていた。「自然への感受性」については尺度が未開発であったために、質的手法が用いられたと考えられる。

篠崎（2015）は、客観的な対人感受性の評価として、会話実験における相手の感情を評定させていた。

原田・土田（2019）は、認知に着目した測定手法を用い、集団パフォーマンスに関連し他者の心を読み取る能力である「社会的感受性」（Woolley et al., 2010）について日本人を対象に測定した。使用された「Reading the Mind the Eyes Testアジア版」（Adams et al., 2010）は、人の目の周辺を写した写真を複数枚提示しそ

こから読み取れる感情を選択させるという課題であり、原版はBaron-Cohen et al. (2001) によって開発された。

峯岸 (2020) は、日常生活で生きづらさやしんどさを感じる場面について、対人関係とその他に分けて自由記述を求めている。同時にHSPPS-Jを用いて仮説の検証も行った上で、自由記述については仮説を設定せず別途KJ法で分析していた。

総合考察と展望

本稿では、日本国内での心理的感受性研究を概観するに当たり、過去10年の感受性・敏感性・Highly Sensitivity Personに関する心理学領域の文献を収集し、その中で用いられていた複数の感受性概念とそれらの測定手法についてまとめた。心理的感受性は大きく[1]感覚処理感受性、[2]対人関係・社会生活における感受性、[3]その他特定の刺激に対する感受性、の3つに分類された。[1][2]の概念は測定尺度の上では混在しておらず、それぞれの枠組みの中で刺激の種類が幅広く捉えられていた。[2]の拒絶感受性等の細分化された感受性の測定では、対象者の状況に合わせた項目が使用されている傾向が見られた。つまり、刺激の種類を細分化することで感受性概念が増え、より詳細な調査が可能になる。援助要請感受性や感謝感受性、自然への感受性のような特定の刺激に関する新たな概念生成についても同様だが、その反面、分類が難しく独立している印象があったため、他の感受性との関連も確認し概念を構造化する必要がある。

したがって、複数の感受性概念とその測定尺度の関連性が不明瞭で構造化されていないこと、そして使用尺度の選択や因子構造が各研究で様々であることが、曖昧さの原因であると考察される。感覚処理感受性と対人関係・社会生活における感受性は、共に精神状態に影響を及ぼすことが分かっているが、各研究で用いられた特定の感受性の高低という情報のみでは、他の感受性における影響までは予測されない。また感受性尺度の総合得点は高くなくとも、特定の項目内容の刺激には悩まされているという場合もあるだろう。しかし社会に流布しているのは、「HSPは様々な場面において感受性が高い」というような曖昧な印象だ。これによる誤った自己理解や他者理解を防ぎ、適応的で強みを活かす環境選択・キャリア選択を実現するためには、心理的感受性概念の種類とそれらの関連性を明示・構造化し、個々の状況に合った測定方法を提供することである。DSTを踏まえると、感受性高者は適した環境ではポジティブな影響を取り込み、力を発揮できると考えられる。つまり感受性高者のウェルビーイングを向上させるためには、適切な環境選択が可能となるような自己理解と、周囲の関わり方や環境整備が、鍵になると推察される。加えて、感受性の高さに悩む者以外は心理的感受性について理解する機会がない、という現状も課題である。5人に1人がHSPの社会において、彼らの対人場面や教育現場、職場をセーフにするためには、幅広い視点から知見を広げる必要がある。さらに社会的スキルとしての感受性についての研究を今後増やしていくことで、強みとしての一面の発信や、スキルとしての感受性を高める助言も可能になるだろう。

引用文献

- 安達未来 2020 「仮想的有能感が教師への学業的援助要請に及ぼす影響」『教育心理学研究』68 (4), 351-359頁.
- Adams Jr, R. B., Rule, N. O., Franklin Jr, R. G., Wang, E., Stevenson, M. T., Yoshikawa, S., Ambady, N. 2010 "Cross-cultural reading the mind in the eyes: An fMRI investigation.", *Journal of Cognitive Neuroscience*, Vol.22, p.97-108.
- 相田直樹・磯部智加衣 2015 「拒絶感受性が他者からの曖昧な拒絶後の選択的注意に及ぼす影響」『対人社会心理学研究』15, 39-44頁.

- 赤城知里・中村真理 2017「感覚処理感受性とソーシャルスキル, 精神的回復力の関連性の検討」『東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究』17, 59-67頁.
- Anita Williams Woolley, Christopher F. Chabris, Alex Pentland, Nada Hashmi, & Thomas W. Malone 2010 "Evidence for a Collective Intelligence Factor in the Performance of Human Groups", SCIENCE, Vol.330 (6004), p.686-688.
- Aron, A., Ketay, S., Hedden, T., Aron, E. N., Rose Markus, H., & Gabrieli, J. D. 2010 "Temperament trait of sensory processing sensitivity moderates cultural differences in neural response", Social Cognitive and Affective Neuroscience, Vol.5, p.219-226.
- Aron, E. N., & Aron, A. 1997 "Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality.", Journal of Personality and Social Psychology, Vol.73, p.345-368.
- Bandura, A., 1986 Social foundations of thought and action: A social cognitive theory, Englewood Cliff, NJ:Prentice-Hall.
- Baron-Cohen S, Wheelwright S, Hill J, Raste Y, & Plumb I. 2001 "The "Reading the Mind in the Eyes" Test revised version: a study with normal adults, and adults with Asperger syndrome or high-functioning autism", J. Child Psychol Psychiatry, Vol.42 (2), p.241-251.
- Belsky, J., Bakermans-Kranenburg, M. J., & Van IJzendoorn, M. H. 2007 "For Better and For Worse: Differential Susceptibility to Environmental Influences", Current Directions in Psychological Science, Vol.16, p.300-304.
- Boyce, P., & Parker, G. 1989 "Development of a Scale to Measure Interpersonal Sensitivity. Australian and New Zealand" Journal of Psychiatry, Vol.23, p 341-351.
- Downey, G., & Feldman, S. I. 1996 "Implications of Rejection Sensitivity for Intimate Relationships", Journal of Personality and Social Psychology, Vol.70, p1327-1343.
- Downey, G., & Lebolt, A., Rincon, C., & Freitas, A. L. 1998 "Rejection sensitivity and children's interpersonal difficulties", Child Development, Vol.69 (4), p1074-1091.
- 江田早紀・日高三喜夫 2017「対人感受性尺度の作成：因子構造と信頼性,妥当性の検討」『久留米大学心理学研究』6, 43-50頁.
- Evans, D. E., & Rothbart, M. K. 2008 "Temperamental sensitivity: Two constructs or one?", Personality and Individual Differences, Vol.44, p.108-118.
- 船橋亜希 2013「成人用感覚感受性尺度作成の試み」『中京大学心理学研究科心理学部紀要』12 (2), 29-36頁.
- 原田知佳・土屋耕治 2019「社会性と集団パフォーマンス：他者の感情理解と自己制御に着目したマルチレベル分析による検討」『社会心理学研究』35 (1), 1-10頁.
- 平野真理 2012「心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討—もともとの「弱さ」を後天的に補えるか—」『教育心理学研究』60, 343-354頁.
- 本多潤子・桜井茂男 2020「日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成」『筑波大学心理学研究』22 175-182頁.
- 飯村周平 2016「中学生用感覚感受性尺度 (SSSI) 作成の試み」『パーソナリティ研究』25 (2), 154-157.
- Kathy A. Smolewska, Scott B. McCabe, Erik Z. Woody 2006 "A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory-processing sensitivity and their relation to the BIS/BAS and "Big Five" ", Personality and Individual Differences, Vol.40, p.1269-1279.
- 梶野潤 1988「社会的技能研究の統合的アプローチ (1) - SSIの信頼性と妥当性の検討 -」『関西大学大学院人間科学』31, 1-16頁.
- 岐部智恵子・平野真理 2019「日本語版青年前期用敏感性尺度 (HSCS-A) の作成」『パーソナリティ研究』28 (2), 108-118頁.
- 岐部智恵子・平野真理 2020「日本語版児童期用敏感性尺度 (HSCS-C) の作成」『パーソナリティ研究』29 (1), 8-10頁.
- 菊地航平・川島哲史・山口義枝・依田麻子 2018「対人ストレスラーがレジリエンスと否定的対人感受性を媒介してストレス反応に与える影響」『日本心理学会大会発表論文集』82 (0), 126頁.
- 倉田義大・新井邦次郎 2015「感謝感受性ならびに感謝表現の尺度作成と心理的機能の研究」『東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究』15, 1-8頁.
- Lennox, R. D., Wolfe, R. N. 1984 "Revision of Self-Monitoring Scale", Journal of Personality and Social Psychology, Vol.46, p.1349-1364.
- Michael Pluess 2015 "Individual Differences in Environmental Sensitivity", Child Development, Vol.9 (3), p.138-

- 143.
- 三島浩跡 2014 「小学生用拒絶感受性尺度の作成」『日本教育心理学会総会発表論文集』56 (0), 435頁.
- 三島浩跡 2015 「循環型いじめに関する研究：拒絶感受性に着目して」『日本教育心理学会総会発表論文集』57 (0), 402頁.
- 峯岸佳 2020 「HSP特性と自尊感情が過剰適応に与える影響について —生きづらさの考察—」『跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要』16, 153-169頁.
- 三好力 1999 「対人関係における感受性研究の動向」『立教大学心理学科研究年報』41, 67-84頁.
- 大嶋玲未・宮崎弦太・芳賀繁 2016 「セルフ・モニタリングが組織内政治の知覚およびスキルに及ぼす影響」『パーソナリティ研究』25 (2), 135-150頁.
- 奈良隆章・木内敦詞 2020 「大学新入生におけるライフスキル獲得水準の性別および専攻別の特徴」『運動疫学研究』22 (1), 13-21頁.
- 越智啓太・熊谷ななせ 2020 「日本版環境刺激敏感性尺度の作成とその特徴」『環境心理学研究』8 (1), 36-36頁.
- Pluess, M., Boniwell, I. 2015 “Sensory-Processing Sensitivity Predicts Treatment Response to a School-Based Depression Prevention Program: Evidence of Vantage Sensitivity”, *Personality and Individual Differences*, Vol.82, p.40-45.
- 李佳奇・串崎真志 2021 「中国におけるHighly Sensitive Personの状況調査：感覚処理感受性と人生の意味および幸福感の関係」『関西大学心理学研究』12, 7-15頁.
- 島本好平・石井源信 2006 「大学生における日常生活スキル尺度の開発」『教育心理学研究』54, 211-221頁.
- 島本好平・山本浩二 2018 「心理社会的な成長につながる気づきのライフスキル獲得への影響：体育授業における自己開示からの検討」『大学体育学』15, 63-71頁.
- 篠崎志美 2015 「対人関係敏感性と対人感受性の関連：主観的評価と客観的評価による測定」『日本心理臨床学会第34回大会（ポスター発表）』1-1.
- 高橋亜紀 2016 「Highly Sensitive Person Scale日本版（HSPS-J19）の作成」『感情心理学研究』23 (2), 68-77頁.
- 寺田未来 2018 「対人感受性や疎外感が学習に及ぼす影響」『日本心理学会第60回総会発表論文集』p 685.
- 藤後悦子・磯友輝子・坪井寿子 2014 「海に囲まれて育った子どもたちの「自然への感受性」」『東京未来大学研究紀要』7 (0), 219-228頁.
- 鳥越淳一 2020 「拒絶感受性に関する海外の研究動向と今後の日本における研究展望」『開智国際大学紀要』19 (0), 111-120頁.
- 薄勇樹・浅岡有紀・逸見知美・田中真理 2015 「大学生の感覚感受性傾向が対人ストレスコーピングならびに居場所感に与える影響」『東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究』15, 139-145頁.
- 結城悠華・月元敬 2021 「感覚処理感受性とベクシオンの関連性」『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』70 (1), 147-155頁.

A Review of the Concept of Psychological Sensitivity and its Measurement in Japan

MATSUZAKI Minako

Abstract

This paper summarizes the concept of psychological sensitivity and its measurement methods in the literature collected in Japan over the past decade. Psychological sensitivity is broadly classified into three categories: [1] sensitivity to sensory processing, [2] sensitivity to interpersonal relationships and social life, and [3] sensitivity to other specific stimuli, with [1] dealing with sensitivity to sensory stimuli, having the highest number of references. From the survey regarding the ambiguity of the concept of sensitivity and its measurement method, a problem ensues in that the classification of stimuli, as in [1], [2], and [3], is probably overlooked in the ambiguous impression of society that “highly sensitive persons have difficulty in living.” This consequently results in the measurement of sensitivity according to individual “difficulty in living” and detailed self-understanding. Hence, it is difficult to measure sensitivity and comprehensively understand oneself in accordance with one’s “difficulty in living.” In previous study, the relationship between multiple susceptibility concepts and their measurement scales is not structured, and the choice of scales and factor structures used differ from one study to another, which is thought to cause ambiguity. Therefore, the clarification and structuring of the relationships among concepts and measurement scales, multifaceted examination using various methods and perspectives, and promotion of practical research and dissemination of findings on susceptibility are identified as future prospects for psychological susceptibility research.